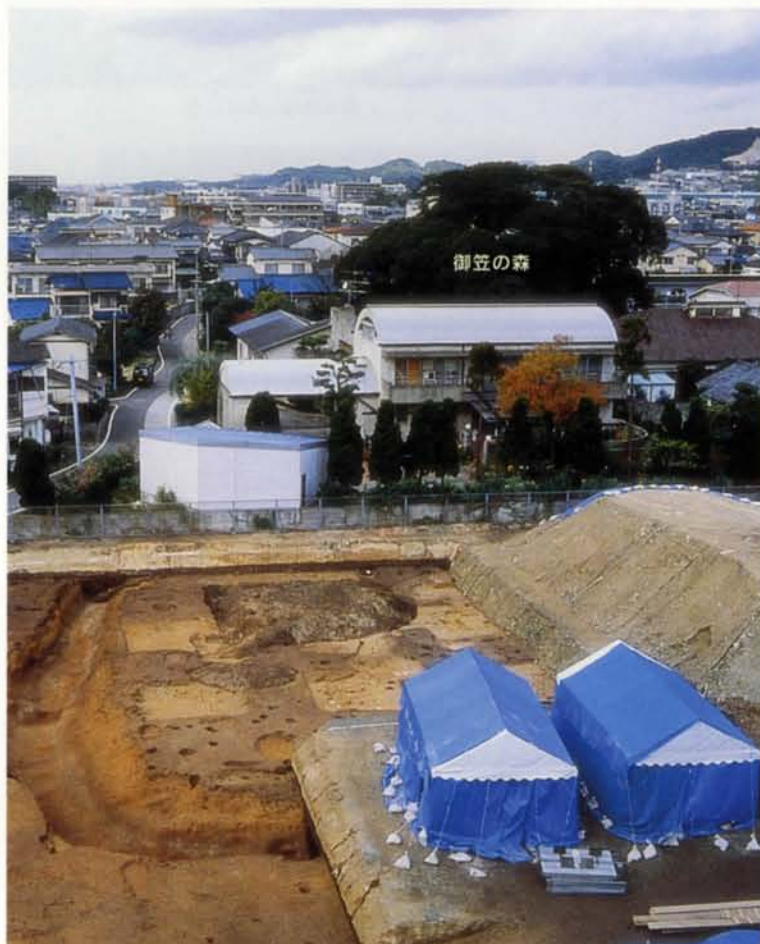


## 御笠の森遺跡

大野城市教育委員会



御笠の森遺跡と御笠の森

御笠の森遺跡は、山田2丁目にある御笠の森の周辺にひろがる遺跡です。これまでは奈良時代の集落の調査が行われていましたが、1999年におこなった発掘調査で、戦国時代の終わりから江戸時代の集落があることが分かりました。

写真の奥に見える森が御笠の森です。調査では大きな溝と建物の跡が見つかりました。溝は幅が3.0～4.4m、深さ1.0～1.5mあります。裏面の地図はこれまでの調査で見つかった遺構を表したものです。これを見ると溝は御笠の森のすぐ南側に位置し、1次調査と8次調査では溝のコーナーが見

ついています。これから復元すると、溝は一辺が約70mの方形に巡るようです。溝の内側から建物の柱跡（ピット）がたくさん見つかったことから、御笠の森遺跡は方形に巡る溝をもつ集落であったと思われます。溝からは中国から輸入された陶磁器や唐津系の陶磁器、銅製の小柄の鞘やキセルなどが出土しました。遺物の時期は、16世紀から17世紀後半までのようです。

江戸時代終わり頃の地誌である『筑前国続風土記拾遺』の山田村の項によれば「此村昔は御笠森の辺にあり、延宝のころ（1673～1681年）今の地に移せり」とあります。今回、発掘調査で17世紀後半以降の遺物が出土せず、遺跡が御笠の森のそばに位置することから、文献の内容どおり、御笠の森遺跡は移転前の山田村の跡であることが分かりました。

上の写真は橋と思われる遺構を検出した時のものです。大きな溝に幅約30cm、長さ70~150cmの細長い溝が直角に交わっているのが分かりますか？これを復元すると、下の写真のような橋があったと思われます。幅が2.0~2.6m、長さが6.0~6.4mの橋で、集落の南西隅に位置しています。また橋の位置する場所ですが、ちょうど御笠の森の横を通して北側に抜ける道に面しています。この道は明治時代の地図にも現れており、古くから村や町をむすぶ道であったようです。橋が集落の内と外をむすぶ場所であることを考えると、御笠の森の横を通る道に面して入り口を設けていることは、まったくの偶然ではないと思われます。もしかしたら、この道は明治時代よりさらに古い戦国時代からある道なのかもしれません。

御笠の森は奈良時代に編纂された『日本書紀』にも登場し、昭和の初めまでは大きな森でしたが、現在は周辺の宅地化が進み、小さな森になっています。山田村が移転する以前、ここには神社や天神様が祀られており、山田村にとって大切な場所であったようです。この御笠の森の南側にあった古い山田村は、一辺70mもの溝を周囲に巡らせていました。溝の範囲や大きさからも、ひとつの村で作業を完成させるのは大変だったろうと思われます。戦国時代の終わりごろ、大きな溝を周囲に巡らせた村は御笠の森遺跡の他にも全国各地で見つかっています。ちょうどそのころ、福岡地方の各地では戦いが繰り広げられていました。もしかしたら、溝は戦いから村を守るために掘ったものとか、溝で囲まれた村自体が武士の「館」であったなど色々な可能性があります。今後調査と研究が進めば、溝をもつ村の内容がより明らかになるでしょう。



橋を検出したところ



橋を復元したところ (中央の板をわたした部分)



御笠の森遺跡の調査地点と見つかった溝 (青い部分)